

当院と保険調剤薬局が連携した

奥州地域 吸入療法指導連携が開始されました！

呼吸器疾患患者さんの病状改善を目指して

副院長兼地域医療福祉連携室長兼内科長兼呼吸器内科長 鈴木 俊郎

気管支喘息や慢性閉塞性肺疾患COPD等の呼吸器疾患の薬物治療において吸入療法は非常に重要ですが、正しい吸入手技ができていない患者が約3割存在すると海外の調査では報告されています（CHEST 2016）。当院入院患者21人の調査でも5人（23.8%）に吸入手技エラーを認め（岩手県立病院医学会総会 2018）、薬物吸入指導の重要性が示唆されました。そこで、「吸入療法の質の向上と良好な治療効果の達成」を目標に、当院と保険調剤薬局が連携する奥州地域吸入療法研究会を2019年2月に立ち上げました。本研究会の特徴を下記に記載します。



当院と保険調剤薬局が連携する奥州地域吸入療法研究会の様子

- ◆ 奥州地域のほぼすべての54薬局と連携
- ◆ 服薬情報等提供料1（30点）を薬局が算定できる同意書を当院で取得することで薬剤師が繰り返し指導することが可能
- ◆ 統一した吸入指導確認シートを使用
- ◆ 指導結果を当院電子カルテに記録
- ◆ 研究会を年2回開催し実績と効果を検討

2019年4月から吸入指導連携を開始し、8月までの5月間に吸入指導を実施した患者さんは44名（男性36/女性8、平均年齢74歳）、疾患名はCOPD33人/気管支喘息7人/咳喘息2人/喘息合併COPD2人でした。吸入指導後に多くの患者さんで手技エラーの減少と理解アドヒアランスの改善がみられ、咳や息切れが改善する効果を実感されました。今後も吸入指導連携を継続することで、奥州地域の呼吸器疾患患者さんの病状が改善すると期待されます。終わりに、本連携に大変お世話になっている奥州薬剤師会長小野寺豊先生と会員の皆様に深謝致します。

岩手県立胆沢病院の基本理念

<基本理念>

私たちは、地域の人々の健康と命を守るため、愛を持って地域医療に貢献します。

<行動指針>

- 1) 患者さんと家族、私たちとの協働医療（専門性を結集した多職種による、患者参加型のチーム医療）
- 2) 患者さんの背景・価値観に配慮した医療
- 3) 患者さんが安心できる、良質で安全な医療
- 4) 地域の医療・福祉・行政との連携と機能分担
- 5) 次の世代を担う優れた医療人の育成

<病院運営方針>

- 1) 救急医療を含む急性期医療
胆江保健医療圏の基幹病院として、24時間対応の救急医療など、圏域の急性期医療、高度・専門医療を担います。
- 2) がん医療
地域がん診療連携拠点病院として、手術・化学療法・放射線治療・緩和ケアなど専門的ながん医療の提供や、がん患者に対する相談支援・情報提供を行います。
- 3) 地域医療支援
地域医療支援病院として、紹介・逆紹介の推進、地域医療機関との共同診療、地域の医療従事者・地域住民に対する研修・教育を行います。
- 4) 災害医療
地域災害拠点病院として、災害時の傷病者の受け入れや地域医療機関への支援、DMATチームの派遣を行います。
- 5) 臨床研修、スタッフ教育
臨床研修指定病院・各種学会認定研修施設として、次の世代を担う医療従事者を育成するとともに、病院スタッフの研鑽に努めます。
上記5項目の実践・充実のため、誇りを持てる職場づくりと健全な病院運営に努めます。

大規模な地震を想定して

胆江地域災害医療実地訓練 報告

災害医療科長 忠地 一輝

令和元年10月11日胆江地域災害医療実地訓練が開催されました。
初めに、訓練にご参加頂いたボランティアの皆様へ厚く御礼申し上げます。

奥州保健所御指導のもと、奥州市、奥州金ヶ崎消防本部を始め、胆江地域の医療機関の関係者の皆様と数回の話し合いを重ね、各病院における訓練（情報伝達訓練、傷病者トリアージ訓練など）、奥州市立総合水沢病院からの患者搬送訓練およびDMAT出動訓練を行うことが決定。当日はDMATは胆沢病院から派遣、また岩手医科大学災害医学講座助教の藤原先生にも御指導頂きました。

当院では、30名のボランティア（防災みなみ、水沢学苑看護専門学校）に傷病役をつとめて頂きました。院内職員は院長、総看護師長、事務局長をはじめ、100名近くのスタッフが参加してくれました（運営者含む）。

13時に「ただいま大規模な地震が発生しました」という訓練放送が入り、各スタッフが自分の頭を災害モードに切り替え。勝又院長＝災害対策本部長の災害宣言を皮切りに、大会議室に災害対策本部を開設。アクションカードに基づき本部員の役割分担を行いそれぞれが仕事を開始しました。本部要員は、BCP（業務継続計画 Business Continuity Plan）に基づいたアクションカードを新規に作成し、それに基づいた訓練としました。

本部では、クロノロの記載、EMIS入力（Emergency Medical Information System：広域災害救急医療情報システム）、入院ベッド調整（退院可能患者の抽出）、診療部門との連携に重点をおいて頂きました。クロノロ記載はこれまでの訓練の経験が生きていたと考えられ、例年通り見やすいものが記載されていました（写真1）。院内患者の把握は出来ていたと思われませんが、普段「担送・護送」で分類している患者さんを「赤・黄」に分類し直す事に課題があると思われました。診療部門との連携では例年同様、情報をどのように伝達するかに課題が残りました。また大会議室にいる本部要員の方から、外来ブースの生の状況が伝わりにくいとの意見が出ました。

時刻	実施者	内容
13:00	本部	本部会議室へ移動
13:02	本部	本部会議室へ移動
13:03	本部	本部会議室へ移動
13:07	本部	本部会議室へ移動
13:08	本部	本部会議室へ移動
13:09	本部	本部会議室へ移動
13:10	本部	本部会議室へ移動
13:11	本部	本部会議室へ移動
13:12	本部	本部会議室へ移動
13:13	本部	本部会議室へ移動
13:14	本部	本部会議室へ移動
13:15	本部	本部会議室へ移動
13:16	本部	本部会議室へ移動
13:17	本部	本部会議室へ移動
13:18	本部	本部会議室へ移動
13:19	本部	本部会議室へ移動
13:20	本部	本部会議室へ移動
13:21	本部	本部会議室へ移動
13:22	本部	本部会議室へ移動
13:23	本部	本部会議室へ移動
13:24	本部	本部会議室へ移動
13:25	本部	本部会議室へ移動
13:26	本部	本部会議室へ移動
13:27	本部	本部会議室へ移動
13:28	本部	本部会議室へ移動
13:29	本部	本部会議室へ移動
13:30	本部	本部会議室へ移動
13:31	本部	本部会議室へ移動
13:32	本部	本部会議室へ移動
13:33	本部	本部会議室へ移動
13:34	本部	本部会議室へ移動
13:35	本部	本部会議室へ移動
13:36	本部	本部会議室へ移動
13:37	本部	本部会議室へ移動
13:38	本部	本部会議室へ移動
13:39	本部	本部会議室へ移動
13:40	本部	本部会議室へ移動

（写真1）これまでの訓練の経験が生かされたクロノロ記載



情報収集する災害対策本部

診療部門では外来診療責任者を中心に、チームビルディングを行っていただきました。すなわちトリアージポストおよび赤・黄・緑の診療エリアのリーダーを指名、各場所の設置を行いました。その後各トリアージポスト、各診療エリアで模擬患者のトリアージ、診断、治療を行いました（写真2）。ボランティアの方々の演技のお陰で、緊張感のある訓練となりました。

当初使用しようとしていた内科ブロックが当日使用不可となりましたが、参加者の方々のその場のアイデアで別な場所に診療エリアを設置し、訓練としてはうまくできていましたし、本番でも同様に使用出来るのでは、とヒントを頂く事ができました。

本部との情報のやりとりについては上記記載通り課題が残りました。今回は一般電話が通じない設定だったため、外来ブースから他の病院への転院搬送の連絡が出来ない状況であり、全ての患者情報を本部で外部とやりとりする必要性がありました。実災害で同様の状況となったとき、外来ブースに衛星電話が設置できれば転院患者については外来で処理出来ますが、衛星電話の通信状況が悪い場合には今回と同様のことが生じると考えています。

実際の災害時は診断、治療にさらに時間がかかるでしょうし、入院や転院搬送も訓練のようにスムーズに行かない可能性があります。今回の訓練が必ず役に立つものと考えています。参加したボランティアの皆様、院内スタッフの皆様本当にお疲れ様でした。

今後とも災害医療への御理解と御協力をよろしくお願いいたします。

（写真2）
模擬患者の的確なトリアージ



岩手県医療局震災応援招聘医師に係る 感謝状贈呈式が行われました



被災地支援として奥州地域の小児医療を支えてこられた参与太田栄理子先生に、令和元年12月26日岩手県医療局長から感謝状が贈られました。

太田先生には東日本大震災の被災間もない時期に被災地支援の申し出をいただき、平成24年4月から令和元年12月まで7年9ヶ月にわたり被災地となった本県の県営医療の復興に大きく貢献していただきました。

医療局長からはこれまでの功績に対する感謝とともに、今後も県営医療の発展にお力添え願いたいとの言葉がありました。

（感謝状贈呈式の様子は、東日本大震災小児医療復興新生事務局のホームページ <http://www.hosokunagaku.jp>にも掲載されています。）

思いをつなぐカンファレンス

昨今、在宅医療・介護の連携が求められており、奥州市においても情報共有シートの見直し等、連携を推進するための取り組みがおこなわれています。そこで今回は、ケアマネジャーさんへ医療機関との連携状況についてお話を伺うため、胆江地区介護支援専門員連絡協議会会長の菊池雅子さんにインタビューをさせていただきました。

—今年度より奥州市の在宅情報シートの様式が見直されましたが、活用状況はいかがでしょうか。



より早い情報提供がよいと考えFAX等を使うこともあります。できるだけ医療機関へ直接持参し、顔の見える情報共有ができればいいなと考えています。

—退院前カンファレンスという場面で関わらせていただくことも多いですが、実際にカンファレンスをおこなったことで、退院後の患者さんの生活の仕方に影響はみられますか？



生活の注意点等をカンファレンスにおいて病院の職員と一緒に確認することで、意識付けができるので、やはり生活の仕方は変わってくると思います。退院後の生活の様子について気にかかる場合、ぜひケアマネジャーに連絡をいただければと思います。

—実際に退院前カンファレンスに参加していただく中で、ご意見などありましたらお願いします。



例えばリハビリが必要な方であれば、PTの方に参加していただくこともありますので、そのようにこれからのサービス利用に必要な情報を持つ多職種の方々に参加あるいは情報や評価をいただけるとありがたいです。

—ケアマネジャーの方々が支援をおこなう中で、普段大切にしていることや心がけていることはありますか？



やはりケアマネジャーとしては、本人の意向を大切にしていきたいと考えています。本人にとってプラスになるよう何度でも医療機関へ足を運びますし、ケアプランも良いものを作っていければと思います。それに関わるご家族や周囲の協力も必要ですので、チームケアで進めていきたいです。

—最後に、地域の医療機関に対し、伝えたいこと等ありましたらお願いします。



医療介護の連携の強化のため、ケアマネジャーにもアドバイスをいただければと思います。また、患者さんが病状を理解した上で今後の生活や最後の過ごし方を考えられるよう、助言をいただいたり、一緒に関わり考えることができるといいなと思っています。



菊池雅子さん
インタビューアー 主事 及川
インタビューアー MSW 岡田

～ 今回のインタビュー先 ～
胆江地区介護支援専門員連絡協議会
聖愛園指定居宅介護支援事業所内



岩手県立胆沢病院 地域医療福祉連携室

〒023-0864

岩手県奥州市水沢字龍ヶ馬場61番地

TEL 0197-24-4121

FAX 0197-24-4180（紹介センター専用）